

高齡化社会における伴侶動物治療薬剤使用動向調査

千葉科学大学 薬学部 田中 紀子

医療現場では診療記録の電子化が進み、蓄積したデータを臨床研究、診療支援、疫学研究等に用いて医療の質の向上に有効活用したいというニーズが高まり、日本国内では総務省、経済産業省、厚生労働省による体制整備や試行調査が始まっている。2010年英国 Liverpool 大学獣医学部 German らは電子記録を利用して犬下痢症に対する薬剤処方実態調査を報告した。一方、日本の動物医療現場では処方履歴を直接調査する試みはいまだない。動物医療現場ではニーズに応じ、人用医薬品が処方され、特に二次診療施設ではその割合が9割に達すると言われている。本研究では、二次診療施設6施設に対し、人用医薬品採用比率等に関するアンケート調査を行った。さらに、大学附属動物診療施設1施設の電子会計システムよりダウンロードした登録医薬品一覧(以下医薬品マスタ)および処方履歴によるデータセット(商品名;処方年月日;診療科;用法;用量;患者ID;動物種;動物品種;性別;体重;年齢)を用いて処方実態調査を試行的に行った。

アンケート調査を行った二次診療施設の人用医薬品採用比率は80~90%以上であった(表1)。薬剤処方情報は調査対象二次診療全施設では電子化されていたが、その品質管理体制を構築している施設は半数に限定されていた(表2)。

表1 調査対象施設病院概略

	A	B	C	D	E	F	G* ¹
診療頭数	約 2000* ²	約 6000	約 5000	3092	回答なし	15000	約 700
獣医師数	27	30	19	11	28	22 +研修医	1
パラメディカル数	診療助手 5 その他 8 事務職員	看護師 4	看護師 3 臨床検査 技師 1 技能員 1	看護師 2 臨床検査 技師 1	看護師 7 技師 2 薬剤師 1* ³ 職員 2	薬剤部に 1 +補助員 看護師 3	事務・ 助手 1

*¹ 対比のため一次診療施設 G も結果に含めた。

*² 係留動物数

*³ 退職

表2 人用医薬品採用比率と処方記録

	A	B	C	D	E	F	G* ¹
人用医薬品比率	91.4%	90%以上	ほぼ人用	約 90%	90%以上	80%以上	5%以下
薬剤処方記録	電子化	電子化	電子化	電子化	電子化	電子化	紙記録
電子化情報 品質保証要員	事務職 員 2 名	なし	なし	事務職員 2 名	回答なし	薬剤部 補助員	なし

*¹ 対比のため一次診療施設 G も結果に含めた。

次に動物診療施設 H 病院の電子会計システムより、医薬品マスタ(採用した医薬品登録リスト)

を入手し解析した。人用医薬品比率は約80%であった。医薬品の製品名をもとに人用および動物用医薬品を特定し、薬効別分類をおこなったところ、人用、動物用とも病原微生物に対する医薬品数、特にパセトシン錠やラリキシン錠等の抗菌薬数が多かった（表3）。

表3 内服薬および注射薬薬剤数

		内服薬	注射薬
登録薬剤総数		463	317
薬剤数*1		446	288
人用 医薬品数	製品数	285	226
	有効成分数	208	176
動物用 医薬品数	製品数	81	54
	有効成分数	39	50

*1 登録薬剤総数のうち、同一商品名で用量が異なる薬剤を1とした。

登録薬剤全体に対する人用、動物用医薬品、内服薬、注射薬の比率を図1に示した。

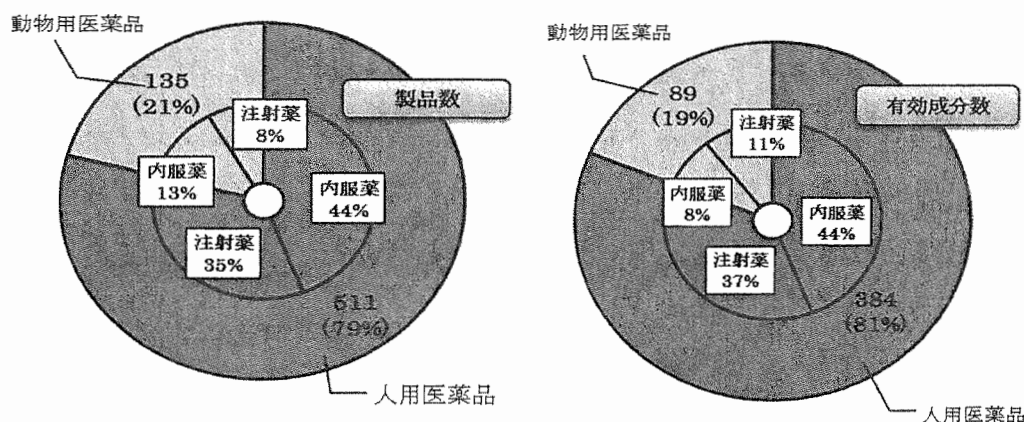


図1 人用医薬品および動物用医薬品薬剤数比率

左に製品数、右に有効成分数による比率を示す。内服薬および注射薬の比率は全薬剤数のうち内服薬および注射薬の占める割合である。

人用医薬品比率は登録薬剤数から導きだしたため、実際の処方件数とは乖離がある可能性があるが、人用医薬品処方の高い傾向は登録数からも伺える。この理由として動物の高齢化が進み、人間と同様に加齢性疾患である生活習慣病や癌が増えているにも関わらず、動物医薬品の需要が開発に追いついていないこと、また、動物医薬品は家畜動物を対象にして開発された製品が多いが、都会に立地する調査対象H病院の診療対象は犬、猫などの伴侶動物であることがあげられる。登録された人用医薬品および動物用医薬品の薬効分類別薬剤数を図2および図3に示した。

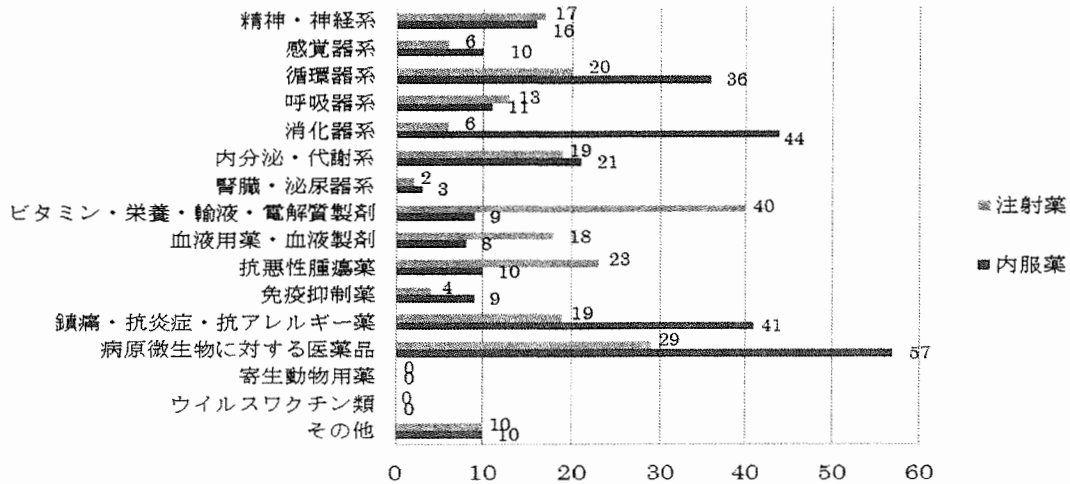


図2 人用医薬品の薬効分類別薬剤数

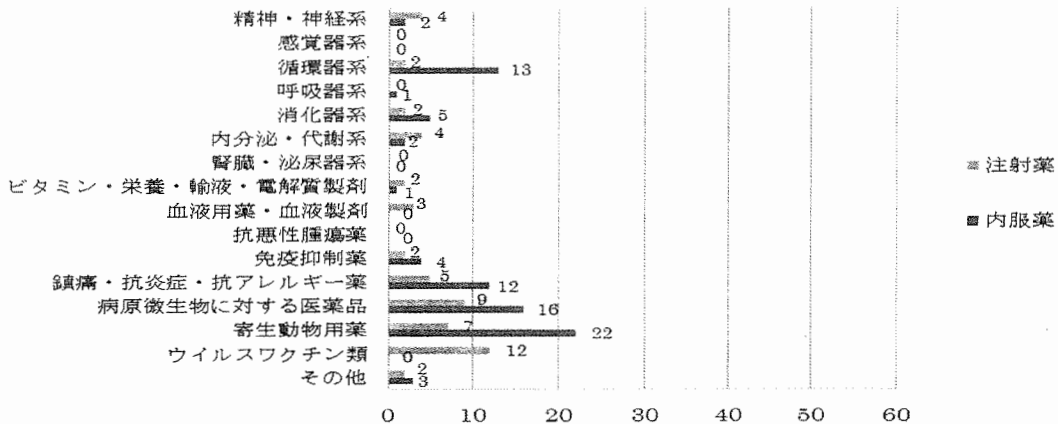


図3 動物用医薬品の薬効分類別薬剤数

人用医薬品内服薬および注射薬の薬効分類別薬剤数は、ともに病原微生物に対する医薬品の登録数が多く、感覚器系、腎臓・泌尿器系および呼吸器系の登録数が少なく、寄生動物用薬およびウイルスワクチン類の薬剤は登録されていなかった。内服の消化器系薬剤数は2番目に多いが注射薬では少なく、ビタミン・栄養・輸液・電解質製剤は注射薬では多いが内服薬では少なかった。病原微生物に対する医薬品の56%は抗生物質であり、注射薬で最多だったビタミン・栄養・輸液・電解質製剤はすべて輸液製剤であった。動物用医薬品内服薬および注射薬の薬効分類別薬剤数ではともに病原微生物に対する医薬品の薬剤登録数が多く、抗悪性腫瘍薬、腎臓・泌尿器系および感覚器系の薬剤は登録されていなかった。内服薬では循環器系の薬剤が3番目に多いが、注射薬では少なかった。人用医薬品および動物用医薬品ともに、病原微生物に対する医薬品および鎮痛・抗炎症・抗アレルギー薬の薬剤登録数が多く、腎臓・泌尿器系および感覚器系の薬剤登録数が少なかった。今後各薬剤の実際の処方をもとにどの薬効分類別薬剤の件数により多用される薬効分類の傾向を把握していく予定である。